
ことのほ

誉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ことは

【Nコード】
N0669Y

【作者名】
誉

【あらすじ】
自分以外の人の外傷や病気を自身に移し変えて治癒するという特殊能力を持っている私、姫宮柚。気づいたら深い森の中でした。ここは一体どこでしょうか？
チキンで無駄にビクビクしてる主人公とそんな主人公を影ながら守ってくれる騎士様との恋愛もの、になる予定です。

いじはぎいでしょっ。(前書き)

R15はとりあえずのものです。初めての投稿なので拙い文章ですが、お付き合いくださると嬉しいですよ。

いつはぶいでしょっ？

私、ひめやゆず姫宮柚には不思議な能力がある。

自分以外の人の外傷や病気を自身に移し変えて治癒する、という私にとってはあるがたくない能力だ。

その能力のせいで家族にも気味悪がられて遠ざけられる始末。私に注がれるはずだった家族からの愛情はすべて2つ下の妹の桜さくらにいつてしまっている。

そんな妹も私には常に冷ややかな視線を向けていた。

つまりは、私は家族の中でどこにも居場所がないという事。

そんな私の今の現状は…。

目の前、緑が生い茂る森の中。ここはどこ、状態。

意識がなくなつて気がつくところだった。どうなっているんだろう？

意識がなくなる前の事を思い出そうとして…止めた。

あんな悪夢は考えたくない。それよりも今は目の前の状況をどうにかするべきだね。

なんとか自分を奮い立たせてとりあえず辺りを見回してみた。先が見えない深い森の中だという事が分かる。

なんでここにいるかは不明。ここがどこなのかも…不明。まさか誰かに連れ去られて置き去りにされた、という事は…ない、よ、ね？ いやいや、まさか。私を誘拐したとしても相手に得な事は一つもないはず。ないない。その仮説はありえない。

こんな所で運良く人が通りかかるなんて都合が良い事ももちろんない…よねえ。

でも大声で叫んで誰か近くに人がいるかどうか確認する勇気のないチキンな私は、いつまでもその場を動くことが出来ない。

こんな時引っ込み思案な私は自分が何をしたら一番良いのかが分からない。

仕方なく、近くのもたれやすそうな木に寄りかかって大きくため息一つ。

でもそれで状況が良い方向に変わるわけもなく、私はこのまましばらく呆然と立ち尽くすだけだった。

「あー…もうどうしよう…」

そのままの状態で結局1時間くらい経ってしまった事に自己嫌悪。名前の分からない鳥だと思われる鳴き声も遠くで何度も聞いて、聞くたびにビクビクしながら周りを見回して。特に何も変わらない森を眺めてホッとして短く息を吐く。そんな繰り返しのみ。

動かなくても何も変わらないのなら、もう自分から動いてこの状況を抜け出すしかないのは分かっているんだけど…。

いつもそうなのだ、私は。自分から動く事よりも先に周りの人が動くのを待っていて、それに合わせて自分も動くこととする…クセって

いうのかな？

こうして一人しかない時でも誰かが来るんじゃないかとかいろいろと考えて結局動かない。

「お姉ちゃんのそういう所がムカツク」とはよく妹が言っていた。先に行動したらしたで「ナマイキ」だと言われていたけれど。姉なのに妹にナマイキ呼ばわりされるって…な、情けない。

ああ、余計な事をまた考えてしまった。

とりあえず、このワケ分からない森から抜け出す方法をいい加減考えないと。

方向を決めて歩いて行ってみるしかないか。

よく森の中で遭難したら助けが来るまで下手に動かない方がいいとか聞くけど、今のこの状況は動かなかったら一生助けが来ないような気がする。

手ぶらな私は携帯も今は持っていない。もっとも携帯があってもこんな深い森の中では圏外だろうけど。

…あの家族が私の為に搜索願を出してくれるとも思えないし。

覚悟を決めて私は直感でこっちに行ってみよう、と右手に広がる生い茂った木々を見ながら震える一歩を踏み出した。

どうか呆れないで欲しい。それでも私には勇気の一步なんだ。

情けなくも足の震えが止まらない。

立ってただけで動かなかったのに震えだけは一向に収まらない。ゆっくりと歩き出した時も震えは変わらず収まらない。この臆病さはきつとこれからも治らないんだろう、な。

それにしても一体ここはどこなんだろうか。

少し歩いて思っただけで、見たことの無い葉の形をした大木や草や

花などがたくさんある。

星の形をした葉とか、なんだこれ。私は今どこにいるんだろう。

上を見上げればまだ陽は高い位置にいて明るいけど、これが暗くなつてしまつたらどうしよう。

その時にまだこんな森の中をさ迷っていたら本当にどうしよう。

泣きそうになりながらも今になって必死に足だけを動かそうとする私。考えたら今のこの状況がとても怖い事だという事に今更ながらに気づいた。気づいてしまった。

後ろ向きな考えばかりが頭をよぎる。もつと明るい事を思いながら進もうとしても、どこまでもネガティブ志向な私は結局「歩いても森から抜け出せなかつたらどうしよう」という暗い思いを振り払えなかつたりした。

抜け出せても家に自力で帰れる距離なんだろうか。お金は今の私は持つていない。本当に気づいたらこの身一つでここにいたのだから。

歩きやすいスニーカーを履いていたのは助かった。ブーツとか、パンプスとかだったらこの森の中をこうも歩く自信がなかつたから。長袖のシャツに黒の長ズボン。それが今の私の服装。すごく地味な格好だけどいつものスタイルだ。

20歳の私はイマドキのオシャレというものにあまり興味がなかった。なるべく目立たないように地味な格好をよくしてひっそりとしてきた。

別にそれに対して不満もない。オシャレをして周りの反応を見るのが正直怖かつたから。

「…あ」

今、どこから声のようなものが聞こえてきたような気がする。

歩いてから結構経ったけど、相変わらずの森。景色の変化が見られないこんなところで私の他にも人がいるかもしれない事にちよつとだけ安心する。

一人よりも二人の方が心強いし、もしかしたらここから出られる道を知っているかもしれない。

…最悪、私と同じ立場で迷ってる人かもしれないけれど。

とにかく、なんとか合流してみた方が今の状況を打開出来るかもしれない。声が聞こえた方に行ってみよう。

…コッソリと。だ、だってやっぱり最初は怖いし。どんな人かも分からないし。

チキンでごめんなさい…！！

声が聞こえたという事は、よく考えたら一人ではないかもしれないな。

話し声っぽかったし。もう一人いるのかも。

ゆっくりと声のした方に歩いていくと、だんだんと話す内容も聞こえてきた。

どうやら男性2人と女性のようなだ。

「…っ離して！離してよっ家に帰して！」

「おいおいお嬢様。いい加減諦めろよ。こんな所では誰も助けに来ねえよ」

ガハハハ、と下品な笑い声が響く。

チラッと見えた状況では二人の男に女性が拘束されて無理やり歩かされている所だった。

…えっと、これってどうすれば。

ここはどっでしょう？（後書き）

更新速度はゆっくり亀ペースだと思われます。すみません；

このような投稿は初なので拙い文章で申し訳ないです；物語は王道な設定ばかりだけどやっぱり好きな展開なので自由に書いていきます。

続きも頑張って書きます。

いきなりピンチ…です。

男性2人に女性一人。

どう見ても男の方は良い人ふうには見えない。女性は手を拘束されて無理やり連れられてるみたいだし。

この状況で果たして声なんて掛けられるだろうか。否、出来ない。

むしろ危険が迫ったような気がする。

私に気づいたらもっとややこしくなると思う。

そうかといってこのまま無視するのも女性が気の毒だ。私に何が出るってわけでもないけれど。

それと気になったのはそれとは別の事。

服装が全然違う。

男性の方は2人とも軽鎧っていうのかな。何か胸当てのようなものをしていて、腰には剣だと思われるものをさげている。

女性はヒラヒラとドレスのような服を着ていてパツと見てどこかの童話の中のお姫様のような服装だ。

現代にどこにでもいるような服装ではない。両方とも。

「…どうなってるの」

半ば呆然と木の陰から三人の男女の様子を伺う。髪の色も女性は金髪フワフワロングだし、男1は灰色がかった赤の髪で男2は茶髪。

男の方はまあ珍しくもないかもしれないけど、腰に付けてる物や身につけてる物が普通と違う。

どこかのファンタジーにでも飛び込んだみたい。

「もういやあっ！」

「ちっ…おい、大人しくしろよ」

ズルズルと引きずるようにして歩いていた女性が堪らずに声を上げる。

バタバタと暴れている女性を面倒そうに強引に連れて行こうとする男たち。

そして腰にさげていた剣を抜き、女性に向けてきた。

「ヒッ…」

「そうだ、大人しくしてろよ。そうすりゃあんたの綺麗な顔に傷付ける事はないからな」

顔の方に刃物をチラつかせて固まる女性にゆっくりと言い含めるように言い放つ男たち。

女性はその言葉に顔を青褪めさせた。

どこかのドラマでも見てるみたいなやりとりだけど、離れて見てる私にも緊迫した状況が痛いほどよく分かる。…現実だ、これは。

「…どう、しよう」

震える小さい情けない声をつぶやく私。

実際、私に何が出来なのか。見過ごしたらあの女性は最悪、殺されるかもしれない。

なんとかして助けたいけど…。

？自分がおとりになって女性を逃がす。

…ダメだ、怖すぎる。捕まったら私が殺される。却下。

？近くの小石とかをたくさん拾って男たちに攻撃。その隙に女性を逃がして私も逃げる。

…石ごときで男たちが怯んでくれるのか大きく疑問。逃げ遅れたら私も女性も殺されるかも。却下。

？このまま見過ごす。

…一番寝覚めが悪い、かも。もしこのまま見過ごして私だけコッソリ逃げたらあの女性は間違いなくタダではすまないんだろうな。かといって、私に何が出来るかというと（以下略）

…ああ、ロクな考えが浮かばない。

私があーだこーだと悩んでいるうちに、囚われの女性とバッチリと目が合った。

「あ…」

どっちが呟いた言葉だろう。そんな事はすぐにどうでも良くなっていた。

「ちょ、ちょっとあなた！見てないでこの状況をなんとかしなさいよ！！助けなさいよー！！」

「なんだと！？どこにいる！」

「あ、ザギのアニキ！あそこに人が！見られましたぜ」

三人三様。私に向かって叫んだ女性と、この状況を見られた事に焦る男たち。

そして見つかった事で頭の中が真っ白になって動けない私。行動に移したのは男たちの方だった。

「捕まえる！！」

ザギと呼ばれていた灰色がかった赤髪の男が茶髪の男に命令する。その言葉に即座に反応して茶髪の男が私に向かって近づいてきた。

「…っ！」

恐怖で動けない私を茶髪の男はいとも簡単に捕まえる。

腕を捕られて強引にザギと呼ばれる人のところに引きずられて行く。う、腕が痛い。

剣先はピタリと私の首筋の方に向けられている。こ、これって絶体絶命というヤツではないだろうか。

「よう、お嬢ちゃん。不運だったな。俺たちに見つかってしまった」

ニヤニヤしながら余裕たっぷりに私に話しかけてくるザギという男。剣先なんて生まれて今まで向けられた事もないし、この状況にまだ全然付いていけない私は固まって反応も出来てない。

そんな私を見て恐怖を感じてるんだろうと勝手に解釈したらしい男たちは余裕の笑みで話し出した。

「ま、まあ実際恐怖感じまくってそのものズバリ、だから反論もしないけれど。…情けない。」

「どうします、アニキ？こいつも連れていきますか？それとも…ここをやっちまいますか」

「…っ」

「まあ、こういう感じが好きなオヤジもいるにはいるからな。一応商品として連れて行くか」

…え。

え、え、…ちょ、待つて。待つて待つて。さっきのセリフってどういう意味？

こつという感じが好きなオヤジ…とか商品、とかって…。

男たちは私の前髪を掴んで顔を覗き込んでくる。ち、近づかないで。嫌だ、怖…。

「…へえ」

「これはなかなか…じゃないですかい」

無駄に長い前髪に隠れて見えづらかった私の眼を晒して顔をジロジロ見てくる。

ザギという男は片手で女性を捕まえておいて、もう片方の手で私の前髪を掴んでいる。力が強いので髪が引っ張られてすごく痛い。

半分涙目になりながら、それでも声は上げない私。…声が出なかったってだけなんですけど。

「それにしても変わった格好だな。どこの国の者だ？」

「…さあ。エマトリアでは見ない服ですね」

知らない地名が聞こえた、ような気がする。けどゆっくり考えるような余裕は今の私にはもちろんない。

どうしてこうなった。なんでここにいろの、私。ワケ分からない。

その時、急に後ろからドン、と押された。押された私は二人の男たちに押しかかる形になる。

うわあ、とかうおっ！とか声を上げながら軽く不意打ち気味になつて倒れる私と男たち。あ、危なっ！剣先を私に向けていたので危う

く首筋が剣に刺さる所だった。ザギが咄嗟に剣を引いたから傷つかなかったけれど。そんな不意打ちをしたのは囚われの女性だった。その隙を狙ってか、女性がザギの手から離れていた。

「あ、てめえ！」

手は相変わらず組みたいなもので拘束されているけど、足は歩かせる為か自由だった。

女性はザギの手から逃れれば後は走り出すだけ。

…って、あの女性、今私をおとりにして逃げたよ。

「…ちっ」

ザギは素早く立ち上がり私を茶髪の男に託すと女性を追って走っていく。

といっても、所詮は男と女の差なのか。それとも見るからにお嬢様の逃げ足だったからかあっさりと捕まっていた。

「…っ離してよ！」

「まったく、同じことを何回もさせるんじゃないやねえよ、お嬢様。…しようがねえな」

ドス、という音が聞こえた。そちらに恐る恐る目をやると、グッタリと気絶する女性とその人を担いでいるザギの姿が。ザギはやれやれ、という感じで大きくため息をつく。

「まったく、余計な体力使いたくないから歩かせたってーのに。結局担いで行くのかよ」

「コイツはどうします？」

「ああ」

そつだな、という呟きが聞こえたかと思うとお腹に鈍い痛みが届いた。

何も言葉を発せないまま、私も意識をなくしてしまった。

ほら、何の役にも立たなかったでしょ。情けない事に予想通り。トホホ…。

ああ、これからどうなるの…私。

いきなりピンチ…です。（後書き）

チキンすぎる主人公ですみません。
あまり話進んでないよう…。次辺りで騎士様出せたら良いなあ。

物語のような展開にビックリです。

「役立たず」

意識が戻って女性… もといお嬢様（服装から見てもお嬢様っぽいし、あの男たちもお嬢様と言ってたしお嬢様でいいや）と目が合った瞬間、開口一番にそう言われました。
ええー… と、自分でもそう思ったけども、人から言われるとかなりキツイですよ…。凹。

気が付くと鉄格子の柵に囲まれた薄暗くて狭い場所にお嬢様と二人、寝かされていた。

人はそこを牢屋と呼ぶ。

見張りはいない。牢屋の扉にはしっかりと鍵がかかっているのを見張りがいなくても逃げられないからだろう。

おまけに私とお嬢様の手と足には縄の拘束がキツクされている。これでは牢屋に鍵がかかっていなくても逃げられない。少なくとも私は逃げられる自信がない。断言できる。

「まったく…なんで私がこんな目に」

ブツクサとなおも文句を言い募るお嬢様。

こんな所に入れられても強気の姿勢を崩さないお嬢様はこうやって見ると本当に美人さんだ。

キツめの目元をもう少し柔らかくしたら好感が持てると思う。

「護衛の奴等は何をしてたんだ」とか「ここから出たら即刻クビ」などヒドイ事を呟いているお嬢様の手元は私が見ても分かるくらいに震えている。

「そうだよ、こんなところにワケ分らないうちに連れられて怖くないなんて事はない。」

「…あの」

「話しかけないでっアンタと馴れ合っつもりはないの」

ピシヤリ、と。話しかける隙を与えてもらえなかった。

…。

いや、まあ別に私も仲良くしたいなんて思っていないんだけど。

アンタって…お嬢様らしからぬ言葉だなあ。

でも、でもね、私もこの状況に全然付いていけてなかったりするから少しでも知りたいとは思うんだ。

少し震えてたお嬢様が心配になったけど、文句を返せるくらいだからまだ大丈夫…かな。

だから、自己紹介と自分の状況をお嬢様に話してみる事に決めた。何か話さないと恐怖で潰されそうになっていたから。…泣きそうだな。

「わ、私、姫宮柚っていいいます。」

「…」

「東京に住んでるんですが、気づいたらあの森にいたんです」

「…」

「情けない事に帰り道が分からなくて…森の中を彷徨っていたら貴方とあの男たちに会ったんです」

「…」

「ワケ分らないうちにこんな状況になってしまっ…あの、どう

にかしてここから出て誰か助けを…」

「無理よ」

え…。

しばらくお嬢様の口が動かないのを気にしないでゆっくり自分の言葉と並べていったら、不意に呟かれた。

「こうなってしまったら逃げ出すのは無理よ。人買いの手に落ちてしまったから」

「え…人、買い？」

「…アンタも噂くらいは聞いてるでしょ。最近エマトリアで頻繁に神隠しに遭ってる事件。私みたいな見目麗しい女性が忽然と姿を消して行方不明。でも実際はどこかの黒組織に売られてるってのがオチ」

「は…はあ」

…自分の容姿を強調するところはさすがだ、お嬢様。

さつきまでしばらく口を開いてもらえなかったのに、この状況を思い出して恐怖を振り払うかのように喋り出した。

「エマトリアの騎士団もこの事件を調べてある程度のことまでは突き止めたみたいだけれど…これを見る限り元はまだ断たれていない」

「…」

「人買いをまとめているボスがよほど狡猾なんでしょうね」

えつと…現代に似つかわしくない単語がポンポンと出てきた。

人買いとか神隠しとか騎士団？…黒組織ってアレじゃないよね。

暴力団関係者とか…違うつばい。

それにエマトリアとか、私が気を失う前に聞いた名前だ。そんな国なんだか地名なんだかは聞いた事ない。

地理に詳しいわけじゃないけど、なんだかお嬢様の口調からみても結構有名なところらしいし。

「あの…エマトリアというのは東京からどのくらい離れているところなんですか？」

「はあ！？アンタどんな田舎から来たの…」

ドッコー…ン！！

突然、離れたところから爆音が聞こえてきた。

相当大きかったのか、ここでも天井からパラパラと砂が落ちてきていた。

その爆音を皮切りに周りが騒がしくなってきた。扉の向こうからワーワーと男たちの怒声だったり悲鳴だったり、時には剣戟が聞こえてきたりと何かが起こってるのは明らかだ。

「な…何」

何が始まってるのかさっぱり分からない私たちは牢屋の中でしばし固まる。

と、突然バタン！とこの部屋の扉が開け放たれた。

開けた人物は髪が青くて片目に眼帯をした太った男だった。

あのザギとかいう男かと同じような格好をしている。人買いの一味だろう。

手には剣がすでに抜かれていてかなり急いでここに来たのか、ハアハアと息切れをしている。

「な…」

「出る！クソツ早くしろ！！」

眼帯男は素早く牢屋の扉の鍵を開けると出るように促した。

といつても、私たちは手足を拘束されている為に上手く歩くことも出来ない。モタモタしている内に眼帯男がいきなり私とお嬢様の腕を掴んで牢屋から無理やりズルズルと引きずるように連れ出した。

「ちょ…痛いっ」

「グズグズするな！クソツなんでここがバレたんだよ…！」

ブツブツと恨み事を呟いている眼帯男には余裕がない。

あぐく、二人を連れ出すのは厳しいと感じたのか私を地面に強く放った。…ヒドイ。

「…っ」

体を地面に強か打ちつけてしまった私。

「ちよつとっ私だけどうするつもり！」

「うるせえ！お前さえいれば今回の取引は上手くいく。そっちの女は捨てる」

お嬢様がなんとか男の手から逃れようとするけれどやっぱり無理で。私はこの騒動で切り離してくれたみたいだけど、そもそも目的はお嬢様のようだから眼帯男はお嬢様だけは諦めるつもりはないようだ。

「…ザギの野郎はどこに行きやがった…クソ…クソッここを逃げ切れたら…」

「どこに…逃げるのですか？」

私とお嬢様や眼帯男とは別の声が入ってきた。

穏やかそうな口調ではあるけれど、眼帯男はその声を聞いた途端に小さく口からヒツ…と引きつるような声を上げる。

ゆっくりと部屋に入ってきたのは若い男の人だった。

白銀の鎧をしていて銀髪のサラサラとした髪に青い眼。どのような言葉が当てはまるのか分からないけれど、とてもキレイな男の人だった。

こんな状況になっているのにそれを一瞬忘れて見惚れてしまうくらいに衝撃的。お嬢様なんかは眼にハートマークが浮かんでいる。

「…チツ」

「あなたが最後です。ですが、先ほどの言葉から仲間はまだいるようですね」

眼帯男とその男に囚われているお嬢様に向かってゆっくりと近づいていく銀髪の男の人。

「まあその調査は後ほどしますが…まずはナタリア伯爵令嬢を離してもらいましょうか」

まるで物語のような展開。

囚われたお姫様を助け出す王子様のような場面。通行人1の私は当然見てるだけ。…まあ地面に横倒れているので何も出来ないのは言わずもがな…。

「く…来るな！」

完全に怯えている眼帯男はお嬢様を盾に近づいてくる銀髪の男の人を牽制しようとする。が、それに動揺する素振りには銀髪の男の人には見えない。

「あまり時間は掛けたくありません」

そう言うのと眼帯男の方からパチツと火花のような音が爆ぜた。

ぎゃっ！と驚きの声を上げ、捕らえていたお嬢様を手放してしまっている。

そこからは早かった。

眼帯男がしまった、と思う間もなく銀髪の男の人の手によって倒れ伏した。

私が気づいたのは助け出したお嬢様を守るような形で銀髪の男の人が立っている所だけだ。どうやって助けたのかはよく分からない。いきなり眼帯男がお嬢様を手放したようにしか見えなかったから。

「ク…」

「終わりです」

「隊長！」

更に2人の男の人が入ってきた。

白銀の鎧の人たちだからこの銀髪の男の人の仲間だろう。その2人のうちの一人が眼帯男を捕らえる。

「ここにいる奴等はすべて捕らえました。」

「ごくろう様です。しかし、私達が来る前にここから逃げた者がいるようです。その者から後で聞き出してください」

「了解です」

「それと、ナタリア伯爵令嬢の保護を。丁重に屋敷に送って差し上げてください」

この騒動から言葉数が少なくなっていたお嬢様はその言葉にハツとする。

…もしかして、今まで銀髪の男の人に見惚れてたわけではないよね…？

「あ、私…」

「ご無事で何よりです。パウリー伯爵が心配なさっていました。屋敷まで部下がお送り致しますのでここからはご安心ください」

「お父様が…」

銀髪の男の人はニコリとお嬢様…ナタリア嬢に向けて安心させるような柔らかな笑みで言葉を告げた。

それに対して顔を真っ赤にして応えるナタリア嬢。

手足の拘束を外してもらって部下に連れられて出て行くときもチラチラと振り返り、銀髪の男の人を名残惜しげに見ながら去っていく。もう一人の部下も眼帯男を拘束した後に連れて出て行った。

なにはともあれ、これで助かった…のかな？

2人の部下の人たちがこの部屋から出て行くと、残ったのは横倒れ

に倒れた私とその銀髪の男の人だけ。

銀髪の男の人は私の方に向いて心配そうな顔を向ける。

目と目が合って、気恥ずかしい。ほんのり顔が赤くなつたのを意識した。

しかしながら今回助かったけど、現状何も変わってないんだよね…。私は一体どこにいるの…。

物語のような展開にビックリです。(後書き)

名前が出てこない…。文章って難しい。

背いていた事実に向き直りましょう。

あのように助けられてから、銀髪の男の人は私に対してもすごく親切だった。

手足の拘束を解いてもらって、氣遣わしげにゆっくりと立たせてもらう。

地面に打ち付けたときはすごく痛かったけれど、体の方は大丈夫みたいだ。

「大丈夫ですか？」

「…はい」

…とてもじゃないけどこんなキレイな男の人とまともに会話なんか出来ない。

受け答えだけでいっぱいになってる私はもう目も合わせられない。

ここに連れて来られてから、服はボロボロだし髪もボサボサ。埃かぶったかのように薄汚れている私にこんなにも氣遣ってもらってるなんて本当申し訳ない。

けれど…。

「あ、えっと…一人で歩けます…けど」

手を取って立たせてもらった私は、緊張と恐怖と安心と…とにかくいろんな感情がごちゃ混ぜになっている状態なので体に力が入ってこなかった。

なので、立ったときに体はふらつき結局銀髪の男の人に支えてもら

う形になった。うう…説得力なしだ。
…わざとじゃない。

「どうかお気になさらずに」

ニコリと、私に向けて微笑んでくる銀髪の人。

うわあ、うわあ恥ずかしい！彼ではなくて私がつ。

「す、すみません…」と小さく謝罪して支えてもらってる腕からな
るべく離れようとする私。

だ、だって薄汚れているのに…この人までも汚れてしまうのがやっ
ぱり申し訳なくて。

なんとか一人でも歩いていけそうだし。逆にずっと支えてもらって
たら緊張で何も考えられなくなりそう…。

すると、ふう…と小さくため息をこぼす銀髪の人。

…呆れさせてしまっただろうか。親切を無視する行為をしてしまっ
て。

「少し、失礼します」

「へ…？えええ…！」

フワリと体が宙に浮く感覚がした。

銀髪の方は私の背中とひざ裏に腕を回して、自分の方に引き寄せな
がら抱き上げていた。…って、これって俗に言うお姫様抱き…ゲフ
ンツ。

「あ、あの…！」

降ろしてください、と言おうと口を開きかけたけれど、笑顔で黙殺
された。あの自然な動作は手馴れた感じがする。

気にしないでくださいとでも言ってるような柔らかい完璧な笑みを浮かべてるよ…。でも…こ、こんな羞恥は私が耐えられないっ。なんとか降ろしてもらえように嫌がり感を出しながら体をよじったりしたけど全然ダメで。しつかりと抱えなおされました…。絶対顔は真っ赤だ、と熱くなってる頬を手でおさえて俯く私。そんな事は気にせずに銀髪の人サラリと「そう言えばお名前を伺ってませんでした」と私に言ってきた。

「私はエマトリア騎士団所属のナイツ・アウシュタットと申します」
一応隊長に就かせていただいてます、と丁寧に乗せてくれた。

「姫宮柚です。あ…柚が名前です」

銀髪の人…もといナイツさんは俯き気味の私のボソボソ呟いた言葉に「ユズさんですね」と微笑みながら応えてくれた。
それにしてもまた出たよ…エマトリア。騎士団。私には馴染みのない単語。

…うん。もう薄々は分かってるんだよ、私。

途中からあれ、これっておかしいなと思って、現実では起こりえない事とか実際に目の当たりにしてしまっ、でもそれでも信じたくなって。

別にいつもの日常であってほしいなんて願ってはいなかったけれど。

けどこれはあまりにも現実離れすぎていて私の許容量を大幅に超えていて思考が上手く付いていこうとしてくれなくて。それでも小説なんかでこんな展開になってる主人公がいろんな事を乗り越えて成長していく、なんてストーリーに心当たりがある自分がいて。

でもまさか私がそれに直面してしまうなんて思いもしてなかったよ。

異質だったのはナタリア嬢や人買いの男たちやナイツさんや、この世界じゃなかった。

私がこの世界で異質なんだ。

「…さん、ユズさん？」

「あ…」

大丈夫ですか、とか気分が悪いのですか、とか心配そうに尋ねてるナイツさんには悪いけれど、全然頭に入ってこなかった。

それでも「はい…」とか「大丈夫です」とか生返事に返せたのは自分で自分を褒めたい。

今はもうこの横抱きにされている状態に赤くなる事はない。むしろ顔は真っ赤から真っ青に変貌しているだろう。

どうしてこうなった。何が原因？

原因、という事でいうならば一つだけ心当たりがある。

それは…。

それは。

咄嗟に自分で自分の腕を掻き抱く。ちょっと焦ったようなナイツさんの顔が見えた。

けどそれを気にするほどの余裕がいまの私には無い。

体は小刻みに震えだした。ナイツさんにもそれは伝わっているだろう。ああ、また心配させてしまうかも。

ここに来る原因になった可能性がアレのせいだというのはならば。

私が元に帰る可能性は…限りなくゼロ、だ。

だってあれからどうなったのか分からない。

妹の…桜の瀕死の状態を私に移し変えた後の記憶がないのだから。

これから考えましょう。

別に私は家族内で虐待を受けていたわけではない。

ただ、両親から受けるはずの愛情をすべて妹の桜に注がれていたというだけ。

桜は人見知りな私と違ってとても可愛かった。笑顔を見せると周りが見惚れて構いたくなるような女の子らしい明るい子だ。

家族の中では桜を中心に回っていて、小さい頃から桜が怪我をした時にはその時だけ空気のように存在してた私に視線が注がれる。

それで桜の怪我はすべて私が請け負っていた。あのありがたくない能力を使って。

今思えばバカな行為だけど、それでもやっぱり両親から褒めてもらいたかったから。躊躇う事もあったけどそういう期待も込めて私は自身に傷を負い続けた。

その度に両親は私を見て「やっぱり気味の悪い子…」と言って去っていくのだ。褒めてもらった事は一度もない。

ただ、それだけ。

衣食住はきっちりしてくれたし、暴力もない。学費も払ってもらえたし外間的にも「良い家族」として生活してたと思う。内聞はこんなだけだ。

その為か、桜は怪我するのを躊躇わなくなった。私という身代わりがいるから。

高校生になったときには桜はガラの悪い高校生とかとも付き合うようになった。

素行が悪くなっていっても両親からの愛情は変わらず桜だ。私も諦めが出来ていたそんな時。

桜が交通事故で瀕死の重傷を負った。

無免許運転してた男子高校生のバイクの後ろに乗っていたらしい。無茶をしてガードレールに勢いこんで衝突。意識不明の重体で病院に運ばれた。

その報せを受けた両親は泣き崩れて、私もさすがに呆然と立ち尽くした。

そして頭の片隅には嫌な予感が付いて回っていて、どうやっても振り払う事は出来ない。

…結局は予感は見事に当たっていて。

病院に着いて桜の状態を聞いて絶望的だと感じたのだろう。

母は私に縋り付いて泣きながら私に乞うてきた。

「柚…桜を助けて。……お願いよ……」

ああ、やっぱりな。と一番に感じた。そして同時に愕然とする。

どんなに空気の扱いでも愛情がなくてもここまで強い事はないだろう、とどこかで期待が小さく残っていたのかもしれない。

だって、これで桜は助かって私も死んじゃうかもしれないんだよ？

そんな考えが浮かばない母ではない。

それなのに真っ先に私に桜を助けるように「お願い」してきた。お願い…無情にもこれが母からの初めてのお願いだ。いつもは「し

なさい」とか指示するような言い方だったから。

泣きながら言ってくる母に私が拒絶出来るはずはない。

本当はすごく怖いけど…瀕死の相手に私の能力を試した事もないし
どうなるか分からない。

でも今、母が頼れるのは医者ではなくて私だけなんだ。

ああ…バカなんだよ私。いくら諦めていても毎回どこかで愛情をもらえるかもしれないと期待してたりする。

いつのまにか頬から涙が伝っていた。どういう意味の涙か自分でもよく分からない。

それでも私は、母の願い通り桜を助ける為に能力を使ってそして意識が途切れたのだ。

と、まあ簡単に言っとさういう経緯なワケで…。

結局あの後桜が助かったのかも、私がどうなったのかも不明だ。

*

フと意識が浮上すると頬から涙が伝っていた。ここに来る前の出来事を軽く振り返ってしまったからだろう。

私はベッドのフカフカの布団に寝かされていた。木目の天井が目に入る。

小さい木製の机とイス、それに最低限の調度品は置かれているだけ

のシンプルな部屋。

小さな窓を見ると外は暗かった。

いつの間にか気を失っていて、どこかに運んでくれた後みたい。

コンコン、と小さくノックが響く。そしてゆっくりと扉が開いてナイツさんが入ってきた。

初めて見た時に着けていた白銀の鎧は着けていなかった。柔らかそうな素材のシャツを着ていてラフな格好だ。

「気がつかれたのですね」

安心したような声でゆっくりと中に入ってくる。一瞬、足が止まったような気がしたけど私が寝ているベッドの前まで近づくと屈んで顔色を窺ってきた。

う…どんな顔をしていいか分からない。

そっと指の腹でやさしく私の目元を拭ってくれたのでその時にしまった、と思った。

涙の跡、全然拭いてなかった。

「熱が少し出ていたみたいなので近くのアプリの街に寄って宿屋をとりました。ご気分はいかがですか？」

「え…そう、ですか。大丈夫です。ご迷惑おかけして本当申し訳ありません…！」

涙の跡には敢えて触れてこなかった。けどやっぱり恥ずかしいので自分でコッソリ拭しておく。…バレバレだろうけど。

ゆっくり上半身を起こそうとした時も手を添えて手伝ってくれた。

熱があつたなんて気づかなかったけど体調は大丈夫そうだ。

ナイツさんには本当に迷惑しかかけてないような気がする。

「…あの」

「はい」

「助けてくださってどうもありがとうございました」

まともにお礼も言えてなかったので、ここでなんとかお礼だけは口にする。

ニコリとあの柔らかい笑みを浮かべて応えてくれるナイツさん。

「食べられるようなら、何か食事を持ってきますがどうしますか？」

「あ…えっと、食欲ないので大丈夫です」

「そうですか…」

あ、心配そうな顔をさせちゃった。

思えば、ここに来てから何も口にしていな。だけど食欲ないのは確かだったし今は食べられそうもない。

ベッドの脇に水差しが置いてあったので、少しの水だけもらった。

口に含んだ水は冷たくておいしい。

それにしても、ここが目的地ではないみたいと言いつつしてたよね。さつき。

どこに向かうつもりなんだろう。

「ここからどこに向かうんですか？」

「…一緒にエマトリアの首都パリスまで向かう事になります。そこでいろいろとお話を伺いたいで…」

お手数ですが…と申し訳なさそうに言ってくるナイツさん。

だけど、私には行く所も特にないし…別に構わない。

ああ…本当に知らない所だ。

「あの…他の人たちは…」

「皆、先に向かつてもらいました。ああ、お気になさらないでください。ナタリア伯爵令嬢が早くパリスに戻りたいと仰っていたので別行動をとっただけですよ」

先に向かった、と聞いて見るからに落ち込む私を氣遣ってナイツさんは言い訳をしてくれた。

…明らかに足引つ張ってませんか？私…。

ナタリア嬢ならそう言いかねないけど…。優しすぎますよ。

「大丈夫なようなら明日向かいましょう」と言ってくるナイツさんに頷く私。

ああ…でも事情はやっぱ聞かれる事になるんだ。どうしよう。

ナタリア嬢に「東京はここからどのくらい離れてるか」なんてバカな質問してしまった手前、下手に嘘ついて後でバレた時に氣まずくなるのは嫌だ。

かといって本当の事を言っても信じてもらえるかどうか分からないし。

ナイツさんなら信じてくれそうな感じはする。でも聞くのはきつとナイツさんだけではないだろうし。

「では、また明日こちらに来ますね」

失礼します、と言ってゆっくり立ち上がり扉に向かうナイツさん。その足が不意に止まる。

困ったようにこちらを振り返るナイツさんに私も首を傾げる。

視線が下の方に向かれる。私もたどって視線を追った。そこには…。

「…！！」

無意識に手がナイツさんの服を掴んで止めていた。

慌てて手を離す。だけど相手にバレてしまってるのであまり意味がない。は、恥ずかしい。絶対また顔が赤くなってるよ。
困ってこっちを見ているナイツさんは戸惑い気味に口を開いた。

「…あの、」

「お、お気になさらず！ど、ど、どうぞ…扉に向かってください
っ」

自分が何をしたいのかがよく分からない。ナイツさんの言葉を真似て丁寧に言ってみたものの見事に声が裏返っている。
ううう…なんか隠れたい…。

しばらく沈黙が続く。…痛すぎる自分を殴…。

ブツと小さく噴出す声が聞こえた。私ではない、とすればその声はもう一人しかない。

恐る恐る見上げるとそこには、楽しそうに笑むナイツさんが。わ、笑われましたけど…。

「ああ、すみません」

と、言いながらもまだ可笑しそうにしている様子を見るとあまり反省は見られませんよね…別にいいですけど。

少し不貞腐れ気味に布団を被ろうとする私の頭にポン、と軽く手が乗った。ナイツさんの手だ。

やさしく頭を撫でてくれている。けど、どうして？

「心細くさせてしまうのは本意ではありません。眠るまでこうして
いましょう」

「…はい？」

い、いやいやいや、ちょっと待って。

そんな恥ずかしい事をさせてしまう事は私の本意じゃないんですけどっ！

「け、結構です…よ」

ああ、情けないくらい動揺してるから声も変に震えてるし。

ナイツさんは「お気になさらず」と笑顔を浮かべながらのお決まりの受け答えをしてくださった。

「も、もう大丈夫です…！」

それでも赤くなった顔のまま眠ることなんか出来ないし、なんとか私の頭から手をどけてもらうようにお願いしようとした。も、もう不安な思いなんか吹っ飛びましたとも。

「…貴方は……ユズさんは、かわいらしい方ですね」

ニツコリと素敵な笑顔を浮かべて私に言った言葉は布団の中に埋もれて撃沈する以上に破壊力抜群のセリフだった。

…このままもう一度気を失ってしまえ。私。

これから考えましょう。(後書き)

いつもより長めになりました。…甘くなってるかなあ。

行動に移す前によく考えましょう。

目が覚めると窓から差す朝日がまぶしかった。

…到底眠れるはずなどない、と思っていたけどグッスリ寝てしまった。熟睡だ。

案外単純だな…私。

ナイツさんは昨日の宣言通りに私が眠った後に出て行ったようだ。本当に騎士、なんだなあ。仕草も紳士的だし私に対しても親切だし何より格好良い。

女性はああいう男性を放っておかないからモテモテな気がする。実際ナタリア嬢とか見惚れてたし。

…私も、だけど。

まだ想像が追いつかない世界だけど、ナイツさんの優しさのおかげで私が少し救われたような気がする。うん、まだ頑張れるよ私。

さて、ベッドから起き上がってからまず最初にしたかった事。身体を洗いたい。

汗や土埃などで汚れているように感じたので、お風呂に入りたい。…入れないかなあ。

見たところ、この部屋にはお風呂やシャワーの設置はないみたいだ。共同でどこかに一つくらいはありそうだけれど…別料金とかだったらどうしよう。

…そういえば、私お金なんか持ってない。

じゃあ昨日泊まったこの部屋は誰が出してくれたんだろう、なんて考えなくても分かる。ナイツさんだ。

うわぁ…また迷惑かけてしまっている。

軽く自己嫌悪になりながら、しょうがないのでタオルで濡らして身体を拭く事に決めた。

タオルは小さな棚の上に2、3枚重ねて置かれてあったから。1枚とって洗面所に向かった。

濡らしたタオルで身体を拭いていく。タオルがほんのり薄汚れていくのと共に身体はサッパリ気持ちいい。

背中も拭こう、とシャツを脱いで一拭きした…その時。

…コンコン。

昨日と変わらないのノックの音が響いた。…って、ちよ、今！？ちよつと待つ…。

「ユズさん、おはようございます。失礼しま…」

「ナ、ナ、ナイツさん…ちよ…タイム！！…です」

扉を今にも開かれそうになるのを瞬時に阻止する。扉の前で必死に押さえた。わ、私にこんな俊敏さがあるなんて知らなかった…！セーフ！

ナイツさんは「…チョタイム？」とか変な発音で疑問を口にしながらも扉の前で止まっている。

でもそんな事を気にしてはいられない。今の私は上のシャツを脱いでしまっているので上半身は下着のみまだ。

「…何かあったのですか？」

「あの…だ、大丈夫です。けど、今はちょっと中に入るのは待つてくださると…わ、私が大変なので」

「大変？何か手伝える事があれば…」

「な、ないですっ」

「でも、」

「ふ、服着てないんで見られたら困りますー！！」

…。

…。

…あれ。

何も返してこなくなつた…？

相手が止まっているのをこれ幸い、とそそくさと上のシャツを着て扉の外に出てみる。

と、そこにいたのは…。

口元を手で押さえて肩を震わせて笑いをこらえているナイツさんでした。

*

「…いつまで笑ってるんですか」

あれから、朝食を食べましようというお誘いで宿屋の中の食堂まで一緒に行った。

けど隣には優しい微笑を浮かべる彼は存在していなくて。

代わりにまだ笑いを我慢している、ようにみえる騎士様がいる。
「すみません」と言いつつ笑いを抑えようとしてくれるけど、なんか腑に落ちない。

… ああ、焦ると頭の中が真っ白になるから言葉を間違えるんだよね。
あ。

そりゃあ誰だって服着てないの見られたら困るよ。当たり前さ。
なぜ「着替えてるから」とか言う言葉を使わずにああいう風にしか
伝えられなかったのか。後悔。

でももうそろそろ流してくれないかなあ。居たたまれないから…！
食堂に着いたときにようやくナイツさんは笑いを納めてくれた。

食堂の中は小さな喫茶店みたいな感じになっていて結構人が入っている。
いる。

皆好きに食事を楽しんでいて、チラツと見えた料理にはパンっぽい
ものにレタスやベーコンみたいなものを挟んで食べている人や野菜
スープっぽいものを啜っている人、朝から豪勢にステーキっぽいもの
を食べている人などさまざまだ。

全部、日本の食べていたものと似ているので食文化は案外似ている
のかもしれない。

味はどうか分らないけれど。

でも美味しそうな匂いが食堂に満ちているので期待は膨らむ。昨日
は食欲なかったけど、今日は食べられそうだ。

メニューはナイツさんにおまかせでお願いした。

メニューを見たら、見たことのない文字の羅列に眩暈がしたのだ。

… 言葉が通じているので文字も理解出来ると思っていただけにショ
ック…。

そういえば、どうして言葉は通じているんだろう？

…考えるの止めよう。なんでこの世界にいるのかが分からないのに文字や言葉の謎がすんなり分かるわけがない。

運ばれてきた食事はお腹に優しくそうな粥っぽいものと何かのスープ。

昨夜、熱があつた私を考慮して消化しやすそうな食事してくれたみたいだ。

早速、「いただきます」をして食事を口に運んでみた。手を合わせた時に不思議そうな顔をされたけど、日本の風習はこっちでは通じてないみたい。当たり前か。

「…おいしい」

ポソリと小さく口にした言葉に「良かったです」と微笑で答えるナイツさん。

本当に美味しい。

材料が何か分からないけど、お粥の方は芋っぽい食感のものを柔らかく煮ていてほんのり甘い。スープは草っぽいのが中に入っているけどこの世界の野菜なのかな？いろんな草がスープの中に入っている。てまさしく野菜スープだった。体に良さそう。

でも苦味がなくて野菜独特の旨みがスープに出ていて温かくてすべて食べられた。

対面に座っているナイツさんは私とは違う料理だ。

先ほどチラッと見えたパンのようなものに野菜やベーコンっぽいのが挟んであるものと野菜スープ。それに別皿でサラダが置いてある。

「その様子だと今日は出発出来そうですね」

「はい、ありがとうございます」

私が食欲ある事に安心したのか、ナイツさんは今日の予定を話し出した。

「今日はこのまま、パリスに向かいます。朝出発すれば夜には到着するはずです。行く道すがらご不便はあるかと思いますが…大丈夫でしょうか？」

「あ、はい。それで大丈夫です」

1日でエマトリアの首都まで行けちゃう距離なんだ、ここって。長い旅に出るような気持ちだったけど、案外近いんだなあ。

2人食べ終わった後に、部屋に一旦戻って身支度（と言っても私はほとんどないけれど）を整えた。

準備万端に整ったナイツさんと私。

宿屋を出て、いざ出発となったその時。

私は案外近い、と思った数分前の自分を罵りたくなった。

目の前の生き物を見上げる。ああ…純真な大きな目がまぶしいです。…そうか…移動手段はファンタジーにふさわしい……………。

「…馬……………ですね…」

そりゃそうですね。車やバスや電車、なんて便利なものはここにはない。

目の前には見事な黒毛を帯びた大きな馬が1頭控えていた。
この馬で丸1日乗って向かうワケで。

自慢にもならないけど、私は馬を見るのも乗るのも初めて。

道のりは長い……な……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0669y/>

ことのは

2011年11月9日03時14分発行